

平成29年度 第1回桑名市総合教育会議 議事録

1. 日 時 平成29年8月3日(木)
開会 午後1時30分 閉会 午後3時16分
2. 開催場所 桑名市役所3階第2会議室
3. 出席構成員
桑名市長 伊藤 徳宇
桑名市教育委員会
教育長 近藤 久郎
委員 松岡 守
委員 佐藤 強
委員 稲垣 陽子
委員 松香 洋子
委員 安藤 智里
4. 構成員以外の出席者
(総務部)
総務部長 平野 勝弘
総務課長 日佐 龍雄
総務課課長補佐兼総務係長 近藤 光彦
(教育委員会事務局)
教育部長 南川 恒司
教育総務課長 山下 範昭
指導課長 野呂 はるみ
学校教育課長 高木 達成
人権教育課長 水谷 昌之
教育環境整備室長 満仲 弘
教育総務課管理係長 郡 厚
5. 議 題 (1) これからの桑名の教育～新学習指導要領を受けて～
①外国語教育について
②道徳教育について
③プログラミング教育について
(2) その他

【総務課長】

定刻になりましたので始めさせていただきます。総務課長の日佐でございます。

会議に入ります前に、公開につきまして、本日、会議の中に非公開の部分はございませんので、傍聴希望の方がいらっしゃいますので、入室のほう、ご了承いただきたいと思っております。よろしくお願いいたします。

(傍聴人の入室)

【総務課長】

ただいまから平成29年度第1回桑名市総合教育会議を開催いたします。

昨年度は2回の会議を開催いたしまして、本市の子どもたちの学力やこれからの本市の教育環境づくりについて助言をいただきました。本日の会議では、新学習指導要領を受けまして、これからの桑名市の教育をどのように進めるかをテーマに、外国語教育、道徳教育、プログラミング教育の3点を取り上げてご協議いただきたいと思っております。よろしくお願いいたします。

それでは、ここからは市長に会議の進行をお願いいたします。よろしくお願いいたします。

【市長】

改めまして、皆さん、こんにちは。

今日は、大変お忙しいところ、本年度1回目となります総合教育会議にご参加いただきましてありがとうございます。また、今日から、安藤委員も教育委員として総合教育会議に出ていただきます。よろしくお願いいたします。

津田学園の話はさておき、桑名は大変暑い夏でありまして、先週は桑名の花火大会があって、今週末にユネスコの無形文化遺産になって初めての石取祭があるという、大変熱い夏でもあります。明日の高校野球の抽せん会でどのタイミングで誰と当たるかがわかるんですけども、桑名市民挙げて、しっかりと20年ぶりの夏の甲子園を応援したいなと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

今日は、新しい新学習指導要領ということで、項目を3つに分けて皆さんにご議論をいただければと思っております。外国語教育、道徳教育、プログラミング教育ということであります。少しずつ国からも中身が出てきているところでもありますけれども、その中で、この桑名においてどのように進めていくのかがいいのかなど、委員の皆様からのご意見を賜ればなと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

それでは、早速事項に入ります。

事項1、これからの桑名の教育～新学習指導要領を受けて～の①外国語教育について、事務局から説明をお願いいたします。

【指導課長】

失礼します。教育委員会事務局指導課課長の野呂でございます。

まず、外国語教育ということなんですけれども、新学習指導要領にかかわりまして、昨日、県の教育委員会のほうで小学校の校長先生向けの研修がございました。その中で、今回の学習指導要領の改訂というのが非常に大きなものであるということ。明治5年に学制が公布されて、昭和22年に教育基本法、学校教育法が出されて、それから70年単位での大きな、実はこれは改訂なんだということでお話を聞いてまいりました。未来を生きる子どもたちに今学校教育の中で子どもたちにどんな力をつけていくか。未来を生きる子どもたちに求められる必要な資質、能力を学校教育を通じて育むことが大事なんだということで話を聞いてきたところです。

その改訂の学習指導要領は3月31日に告示されておりますので、その概要を資料の1ページから3ページに載せさせていただいております。資料4ページは、今後のスケジュールを示したものでございます。

教育現場では、この数年で多数の定年退職者が見込まれてきます。それも見据えた対応が当然必要なんですけど、そこに主体的、対話的で深い学びにつながるような授業改善、教科横断的な学習を実施するためのカリキュラムマネジメントなどを各学校が行わなければなりません。

小学校においては、評価を伴う特別の教科道徳が来年度から始まります。その上に、新たに3・4年生に外国語活動、5・6年生に英語科が上乘せになり、プログラミング教育を各教科と位置づけた授業を新たに工夫することになりました。来年度から移行期間となりますが、7月7日に文科省より移行措置が示されております。資料の5ページから8ページにかけてがその概要、資料9ページは、外国語教育を特出した移行措置のまとめになっております。小学校では、スケジュールを見ていただいてもわかりますように、全面実施までの2年間に、英語教育やプログラミング教育を含めて、各教科ごとの現行学習指導要領の内容に加えて新しい内容も移行措置に従って、段階的に実施しなければなりません。

英語教育については、3年生以上の学年で新たに15時間を確保するために、例えば、例として、総合的な学習の時間を減らすとすることができるというふうになっておりますが、そうなりますと、既に定着している各校での総合的な学習の内容の調整が必要となってきます。また、文科省が開発中という新たな教材が配付されるのを待って、それを用いた授業も考えなければいけません。ただ、小学校では、既に外国語活動として英語になれ親しむ授業を行ってきておりますので、3・4年生で始める外国語活動のイメージは共有できます。しかし、5・6年生で新たに始まる英語科は、小学校教員には指導経験がございません。英語科は、将来、大学入試制度とも深く関係しますので、指導できる人材を確保して小学校に配置し、授業ができる体制を整えることも教員の負担を軽減することともあわせて喫緊の課題だと考えております。

まず、これにつきましては以上でございます。

【市長】

外国語教育についての今事務局から説明があったところですが、ここで皆さんからのご意見を賜りたいと思います。

まず、教育長から。

【教育長】

それでは、失礼いたします。教育長の近藤でございます。

今、野呂課長から説明がありましたけれども、確認の意味で少し言わせていただきますと、学習指導要領の改訂が3月31日にされました。その背景が、1つは、少子高齢化で人口減少社会になるので、今ちょっとありましたけど、未来が未来がと言われていましたけれども、あまり明るい未来ではないかもしれないという状況の中で、不透明な激動する未来になるんじゃないかということも国では想定をしているんじゃないか。教育としては、その中でもしっかりと生きる、人間として、あるいは人として社会をつくる者として生きるような、まさに生きる力をつけていかなきゃいけない。そのバックには、グローバル化の話と情報化の進展といいますか、AIの話がありまして、私も、記憶に新しいところでは、アメリカの大学の先生が、今小学校に入学した65%の子が、全然違う職業になるんだよという話がありましたので、そんなあたりからかなり危惧をして文部科学省も考えたんじゃないかと。よく案内されている中では、人口知能が進化していくと、人間の働き場所がなくなるんじゃないかという心配と、それから、今学校の中で教えていることが時代が過ぎるともう意味がなくなってしまうんじゃないかというような中での改訂かなと思っておりますので、かなり、今、70年ぶりと言われてましたけれども、相当せっぱ詰まった中での改訂かなと認めていまして、その中で、今回非常につらいのは、学習内容は上乘せされるんですけども、なくなるものは全くないという状況なんですよね。後ほどまた時間割のこととか、今の15時間プラスとかいうのとか35時間の話が出てくるかなと思うんですけども、そんな中で、じゃ、今の話が合った外国語活動あるいは英語をどういうふう導入していくのかということが危惧されると思うんですけども、最近、企業さんでは、完全にオールイングリッシュで1日過ごすとか、あるいは日本人の外国語がしゃべれない人よりも、アジアの人たちの外国語をしゃべれる人を優先的にとりましようというようなこともありますので、そのあたりで桑名としてどういうふう考えていったらいいのかという議論を今からしていただかなければいけないと思うんです。

そうなる、夢を持って、その夢に向かって努力するというような形でこの総合教育会議も市長さんから提案がありましたし、こうやってビジョンもつくっているわけですけども、その中の、今までは、

読み、書き、計算というのが基本スタンダードだったんですけれども、その中に英語というのが入ってくるんじゃないかなと思いますので、そのあたりの議論を皆さん、またご意見いただければありがたいなと思って、ちょっと確認の意味で発言をさせていただきましたが、よろしくお願ひしたいと思います。

【市長】

ありがとうございます。

世の中も変わってきて、企業も変わってきて、それを受ける学校も変わっていかなくちゃいけないんだけど、なかなか、今でも大変なのに、そこにオンされてくるということで今後大変な部分があるということですね。その中で、桑名の子たちに外国語教育をどのように実際に指導していくのかという大きな課題があるということだと思いますけれども、では、稲垣委員、お願いします。

【稲垣委員】

新しく学習指導要領が変わるということで、個人的には英語も道徳もプログラミングもすごく大事な要素だと思っているんですよね。ただ、どう教えるかという、学校の先生の意識改革、結構変わっているとすごく思うんですけれども、単純に時間の、ほんとうに働き方のマネジメントだったりとか必要なサポートだったりとか、そういうものがますます必要になってくるんじゃないかなというのはすごく思います。あと、いわゆる教えるという一方通行じゃなく、大抵、新しいことをしなきゃと思うと、人は、何か自分がわかってなきゃというので頭がいっぱいになっちゃうんですね。そうじゃなくて、せっかくだから、先生たちもアクティブラーニング的な、新しいやり方を学ぶいい機会だと思って取り入れられたらいいかなというのは1点、すごく思いますね。

英語教育に関して、松香委員がいらっしゃいますので聞いていただければと思いますが、1つ、松香委員がおっしゃっていた言葉で、小学校のときには別にぺらぺらしゃべれるようになるわけじゃないんだと。ただ、やっぱり、ハローと言われてハローと言いつ返せるような、昔、ありましたよね、ディス・イズ・ア・ペンとかではなく、ちょっと会話ができる、何か楽しめるみたいな、そういう、それは、多分、英語ができるとかではなく、いろんな人と大人になったときにかかわっていくというセルフイメージだったりとか、妥協なく自分の意見が言えるようになるという、すごく自分自身の状態も変わってくると思うんですよね。そういうのを目指してぜひ英語教育をやってもらいたいなというふうには思っていますね。

【市長】

最初の事務局からの説明にもあったように、小学校の先生は、こういうふうに教えたことがないという、おそらく今、恐怖にとらわれている部分もあると思うんですよね。でも、そうではなくて、新しいやり方でどのように英語を子どもたちに楽しく、コミュニケーションのツールだという形で伝えられればいいよねということですよ。

【稲垣委員】

そうですね。思いますね。

【市長】

なるほど。わかりました。ありがとうございます。

では、次、松香委員、よろしくお願ひします。

【松香委員】

英語を専門にしているの、今、桑名プランというのを、桑名市ではこういうふうに行っていますというプランをどうにか立てていただこうと思って、小中英語の代表部会というのをつくっていただいたんです。今日も会議があるんですけど、今、こういう表ができつつありまして、小学校1年生から中学校3年生まで、どのように聞く、話す、読む、書くの4技能を展開していくのかという、今理想を、キャン・ドゥーというんですけど、こういうことができるようになりますという表を全部つくってもらっているんですね。今日あたり確定していくかと思いますが、実際にこれができたからといって終わりではなくて、それをどういうふう、タスク化というんですけど、授業の中でやっていくのかというのと、あと、それをどういうふう、評価に結びつけるかという問題を次にやっていきますけど、私が考

えている桑名プランというのは、授業も、例えば小学校で、「Hi, friends!」という教科書なんですけど、その教科書をこなす、中学校だったら、教科書があるんですけど、それのほかに、多分、二千二十一、二年ぐらいまでには中学校3年生全員に英検を受けさせるという方向になると思うんです。そうすると、市がお金を出して1回は受験を保証するみたいなことをやっているところが、今、180自治体ぐらいあるんですね、日本で。全県でやっているところもあるんですね、4つも5つも。全員希望者にはやるみたいなの。そうすると、英検というのは、指導要領に沿っていないわけじゃないんですけど、指導要領に60%、あとの40%は課されていないことも出るんですね。六、七十%。でも、検定である以上、学校でやっていることをやるのは期末テスト、中間テストですよ。じゃなくて、検定ですから、やったことがないものにもどうやって対処できるかを見るのは当然ということらしいんですね。だから、そうすると、少し輪が大きくなるんですけど、私が考えている桑名プランというのは、学校でやっていること、英検で課されること、そのもう一つ上もつくりたくて、何か市民でみんな英語を使って楽しいとか、自信が生まれるとか、そういうようなことになるといいかなと思って、この英語部会の方々に努力していただきながら、何か日本一有名な桑名プランというのをつくってみたいなのと今画策しております。

【市長】

学校と英検と、またそれに加えてといたしますか、市民の方も英語を使って何か楽しむという。

【松香委員】

何かそういうような。どうしてそういうふうに英語が必要かという、やっぱり日本の子は、国際的に見ると自信がないというのが一番の問題と、あと、自己肯定感が低いということがしょっちゅう言われていまして、やっぱり英語がものすごくたくさんしゃべれるとか、ぺらぺらしゃべれるとか、文法を知っているとかがいなくて、すごく自己肯定感があって、今のプログラムでも、中学校3年生になったら桑名自慢ができるとか、そういうことも含め、郷土のことも話せて自分が自信を持って自分の立ち位置と桑名市民である、そういう誇りみたいなのを外に発信するみたいなことは英語がすごくやりやすいので、そういうことがいいかな。それと、多分、桑名の中でも外国人も増えてくるでしょうし、そういうグローバルゼーションというのは外に行くのと中に来るのと両方ありますから、そういうことを桑名の市民がみんなのできるようになればいいのかなと思って、今、3重に考えております。

【市長】

何かまちづくりの中にうまく英語を使ってブランド力を高めるとか、そういうことにもつながってくるんでしょうね、今のお話は。

【松香委員】

そうですね。せっかくジュニア・サミットをおやりになったと聞いたので、それを見たわけではないんですけど、そういうことに興味のある方もいらっしゃるんですけど、もうちょっと広範囲に。でも、やっぱり保護者としては、でも入試があるでしょうとか、でも中間があるでしょう、期末があるでしょうとなっちゃうので、そのどれも対処しなきゃいけないと思うんですけど、夢を描きながら、花火をどーんと打ち上げるんじゃなく、何かもうちょっと根づいたものをつくりたいのと今思っています。

【市長】

石取祭とかをもう少し英語で説明できるとね。日本一やかましい祭しか言っていないですけど、装飾はこれこれこんなすごさがあるとかね。

【松香委員】

そうですね。あれ、わかりませんよね。名称からは何をやるんだか知りません。

【市長】

石を取る祭ですからね。

【松香委員】

石を取るんですか。

【市長】

河原の石を取って神社に運んでくるという祭なんですけど、その間がおもしろくないので、かねをすったり、太鼓をたたいたりするんです。

【松香委員】

地味なお祭なわけですね。

【市長】

それがめちゃくちゃうるさくて、とにかくやかましいんですというお祭ですので、そういうのは英語でもアピールしがいがありますよね。

【松香委員】

そうですね。でも、志摩市でも、何か海水をかけまくるようなお祭とかをやっていましたよね、きのうあたりテレビでね。

【市長】

ありましたね。

【松香委員】

だから、そういうお祭は絶対どこか楽しい部分があると思うので、そういうことも。これから郷土愛を英語で発信していくということはすごく必要なとは思っていますけど。

【市長】

あと、委員にもう一つ聞きたいんですが、今、英語の時間を15時間オンしなきゃいけないとかがあって、最近、モジュールというんですか、45分の授業じゃなくて、それを3分割して、いろんな、朝やったり、お昼を食べながらとかいろいろあったりするんですが、そういうのはどうなんですかね。

【松香委員】

最初、文科省がモジュールをすごく奨励したときがあったんですけど、今、すごくうるさく指導していて、要するに、何が変わったかという、調査官とかも言い分が大分変わってきて、45分の中と切り離したものをやっちゃいけないとすごくはっきり言い出したんですね。

【市長】

そうなんですか。

【松香委員】

そうなんです。それで、そんなことをいっても、今の英語教育の根本的問題というのは、単元学習といて、1つの単元があって、それはほかの教科でもやっているのかもしれませんが、単元学習とあって、じゃ、今回はスポーツのことをやりますとか、好きな食べ物についてやりますとか、一個一個終わらせていくんですね、単元学習というのは。それだと英語は身につかないんですね。英語は、触れる時間が少ないから、何度もぐるぐるやるような漢字練習とかそういうことをやらないと、何一つとして身につかないんですね。だから、単元学習というのは根本的に問題なので、私としては、どうにかそれを。だから、苦肉の策としては、今、45分の中にモジュール的な漢字練習みたいなぐるぐる部分をどうにか入れていただくようなプランを立てています。それじゃないと、文科省が、あなたのところは単独でモジュールをやっていますねという指導が入るらしいんですね。

【市長】

そうなんですか。

【教育長】

60分もありだということを行っていますね。

【松香委員】

でも、主体があって、活動があってから、活動の中で語句を学ぶとなっているから単独でやっちゃいけないというんですけど、国語だって、でも、単元学習のほかに読書もあり、漢字もあるじゃないですか。だから、そういうふうにやらないと実力がつかないので、主体があればいいということではモジュール学習は可能かもしれませんが、文科省が恐れたのは、結局、モジュールやっていいですよとなると、いろんな学校で英語の、じゃ、アルファベットを徹底的に書けるとかそういう訓練だけに走るとい

うのを封じようと思ったらしいんですね。だから、今そういう指導が入っているんですけど、でも、絶対に子どもも繰り返しやらないと、英語は特に接触時間が短いですから、繰り返す部分がないとうまくいかないの、それはどうにか工夫してやろうかなとは思っていますけど。

しかも、中学校3年生のときに英検3級をみんなが受けるとなると、さっき言ったように、教科書に課されていない部分もあるので、応用力はつけていかないといけないんですね、どっちにしろ。対応力というか。そうすると、いろんなことをやっていたほうがいいので、小学校のときから。「Hi, friends!」だけやるというのには問題があると私は思っています。

【市長】

そういうのもちょっと参考にしている。

【教育長】

今ちょうどその辺の作戦を考えていただきながらやっているところなんですけどね。

【松香委員】

そうですね。その15時間がとれないというので、この間も委員会ですったもんだやっていたようですが、考え方として、今あるものを全て死守して、その中に15時間とか、絶対、どんなことがあっても生まれませんよ。だから、何かと何かをくっつけるとか、何かを諦めるとか、何かをやめるとかしないと、その議論が桑名の先生たちはすごく下手で、とにかく今あるものを全部守ってどうか、そんな、何十回会議したってできないんじゃないですかと私は思うんですけど。

【市長】

みんな真面目なんですよね。音楽と英語とかやっしまえばいい、何かね。

【松香委員】

すごく守りの姿勢が強くて。

【市長】

体育と英語とかね。

【教育長】

時間だけ、15時間というのは移行措置期間だけ。また、35時間、いかないといけないのですね。

【市長】

プラスね。

【教育長】

その後、今おっしゃっていたような形で、ほかの横断的とよく最近言っていますけれども、その部分を教科ごとに守ってしまうんですよ。そこが問題なんですけどね。

【市長】

縦割りだな、やっぱりね。

【松香委員】

というか、教育長さんは国語の先生だとさっきお聞きしたんですけど、実は英語を、国語を一回減らしてみるのがいいんじゃないかと私は個人的には思っていて。国語を3時間ぐらいに減らしていただいて、英語を2時間ぐらい。

【教育長】

そこまで我々はついていけないのでね。それでも、やっぱり、小学校と中学校と同じことをやっているんですよ。まあ、レベルがあれですけどね。だから、それはもうちょっと見直してもいいんじゃないかなと。

【松香委員】

いや、全ての教科は日本語で授業しているんですから、国語はいろんな意味でやっているんですね。英語というのは全然違う領域で、その道具すらないので、少しやらないとできるようになりっこないんですよ。話した経験とか、何かやった、人々と接した経験とかをやると時間もかかるので、家庭科の時間のように何かつくって食べるとか、体育の授業みたいに実際に何でもやってみるという時間がない

といけない。そういうふうに言われると、国語の先生からどれだけ反発が来るかわかって、算数を減らせばいいんじゃないですかとか、そんなことを言った途端に大変だというのはよくわかっているんですけど、同じ言語だから、国語をこれからアタックしようかなと思っていますけど。だって、英語をやるも国語ができるようになるんですよ、そういう意味では。同じ言語ですから。

【教育長】

前に先生がおっしゃったような、国語で語彙力を増やしていくと、英語の力にもつながりますよね。

【松香委員】

そうですね。

【教育長】

だから、それこそ乗り入れをしていったらと思うんですけどね。

【市長】

相互乗り入れ。そうですね。

【松香委員】

だから、全国いろんなところで小中一貫とかをものすごくやっていて、今、小中一貫ときちっとやっているのは18%と出ていて、40%が今考慮中らしいんですね。だから、その中の枠の中でもまた合理的にできる、小中連携の中で時間を満たすというのもできると思うんですけど、何か柔軟に、桑名方式というか、桑名プランというか、そういうのをつくれたらいいのかなと。どこも今悩んでいるし、どこも考えていますけど、ちょっと一歩先んじてもいいかなと思うんですけどね。

【市長】

みんな真面目に目の前のことだけ考えちゃうんですね。もっと俯瞰で見て。

【松香委員】

もう、すごいです。

【教育長】

最近、よく接触していただいているので。

【松香委員】

いや、桑名市の方はみんな真面目だとよくわかりました。だけど、それだけでは議論が進まないかなと思っています。

【市長】

そうですね。その辺はしっかりとまたマネジメントしていってもらって、教育長に。お願いいたします。

【教育長】

そうですね。お願いいたします。

【市長】

じゃ、次、安藤委員、よろしくお願いします。

【安藤委員】

よろしくお願いします。

コミュニケーションツールとしてやっぱり英語というのは、とても必要だと思います。自分も英語ぐらい話せないとなと今はほんとうに思うので、これからはそれが必要だと思います。そのために、やっぱり小さいときから触れていくのが大事だと思うので、外国語教育が始まったときに、小学生の子どもたちというのは、シャワーのように英語を浴びせてあげてほしいみたいな、文法が何とかとかややこしいこととか、読めるとかあんなことはどうでもいいので、いつも英語が、いつもということではないけれども、授業の時間のときには英語が降ってくるような感じで、先生も、なかなか大変だとは思いますが、先生も一緒に頑張っているんだよというところを見せてもらったらいいんだと。それはちょっと矛盾を感じたんですけど、やっぱり英語を浴びせるんだったら、正しいネイティブの英語じゃないとは思っていたんですけど、なので、そういう環境というのは必要だなと思っています。

ただ、今も話があったように、15時間何たらとか、学校で何とかしていけとかと言われると、それはもうもうほんとうに無理というふうに、先生方がほんとうに無理だと思われると思うんです。なので、今も話があったみたいに、今のところに15時間上乘せじゃなくて、もっと柔軟に考えていかないと。松香委員が言われたように、市民全員でとか、そういった学校以外のところでもいろいろと考えてくださっている部分があるので、そういう力も得てやっていかないといけないと思うんです。

私が以前いた学校では、地域のECCの塾の先生が評議員をしてくださっていたので、私、ボランティアで来てやろうとか言ってくださって、そんなうれしいことはないといって5・6年生に、外国語教育が入ってからは1・2年生、3・4年生を年間1クラス5回ぐらい入るような感じでやってくださっていて、そうしたら、地域に結構英語が話せる、外国へ行ってたとかいうお母さんは結構いるんです。スクールサポーターで募ってみると手を挙げてくださる方もみえるので、特別非常勤とかという県の制度があったのでちょっとお金も出るんですね。そんなのをやってみませんかみたいなことで、1人では無理なので、じゃ、ここに集まった3人で何か授業を組んでやるのならいいですとあって、いつも校長室で、次は何をやろうとか、さいころをつくったりとかシールをつくったりとかして、年間1クラスに5回ぐらいは入るかな、1・2年を担当します。それで、3・4年をやっているECCの先生の授業を見て、いろいろ工夫をしてやりますみたいなことでずっと三、四年前からやってくださっていたんです。とてもいいことだなと思って。

そんなふうにして、学校の先生だけで何とかせいと言われると、とても先生たちのモチベーションが上がらないので、工夫をしていけるといいなというふうに思っています。

【市長】

1つは、やっぱり、学校の中でやるべきは、縦割りを超えていくというか、柔軟に、教科だけで見ずに、何かとやっぱりまぜるみたいなことは考えていかないといけないというのと、もう一個は、いかに外の、外部人材といいますかね、いろんな方、得意な人に入ってきてもらってやれるようにする、何かそんな土壌づくりが必要なのかなと捉えさせていただきました。

すごいですね、ECCのそんな先生に入ってください。

【安藤委員】

以前のPTAの役員もしてくださっていた方みたいで、そういうやっぱり。新興住宅地ではあるけれども、根つきつつあるみたいなどころの感じはあってありがたかったですね。

【市長】

ジュニア・サミットで52人ですか、通訳ボランティアで来ていただいているというような実績もあつたりして、その方が、今まさに学校に入ってきていただいているんですね。

【教育長】

ただ、今、安藤委員がおっしゃっていたけど、県からそういう制度もあるんですけど、そんなにたくさんはできませんので、ある程度やっぱりちょっと。来ていただいて完全ボランティアですよというわけにいきませんので、持続可能にするためには、そのあたりを考えないといけないかなとは思っているんですけれども。

【安藤委員】

地域性もあるかもわかりませんが、完全ボランティアですよといってもやってくださる方もあって、やり始めると、お母さんたちも、そうやってして相談をして、次どうしようとか、子どもが反応してくれるとうれしいと言って戻ってきてくださるんですよ。

【市長】

励みになるんです。

【安藤委員】

その方たちも、またパートに出だしたりとかして、私できないから次の人を引っ張ってきたわとかというので。全然別にお金の問題じゃないかなとは思いますが。

【教育長】

確かにね。そういう方を発掘しないといけないんですけどね。

【市長】

何となくそういう人を連れてくる能力みたいな、そういうコーディネート能力みたいなものが、よりこれから地域を掘り起こして、今までなかった多分ネットワークですからね、それをまたつくれるようにこれは頑張っていかなければいけないですね。

【松香委員】

第一歩を踏み出すのが難しいですよ。このようなわりと、何というか、おしとやかな地域では。英語を話すのを隠していたりとか、そういうような、どっちかというね。それを誰かが口火を切ると、私だって英語ぐらいという方は結構民間にはいます。

【教育長】

だから、ジュニア・サミットで活躍していただいた方というのは、非常にその入り口にはなるのかなと思っているんですけどね。

【市長】

今、産業観光で海外から視察を呼ぼうというのをやっているんですけど、一番受けたのが、刀鍛冶屋、その鍛冶屋さんに連れていったのが一番感動してもらったんですけど、そこで我々が一番びっくりしたのは、その奥さんがめちゃくちゃ英語を話せたという。すごくびっくりして。彼女も、ものすごく生き生きと自分の家のやっていることを話をしてくれるので、来てくれた海外の方もすごく喜んでくれたんですけど。何かのきっかけでそうやって発掘できる機会もつくっていかなくちゃいけないですよ、いろんな意味で。学校で手を挙げてもらうとか、我々もそういう人たちはどこかにいないかと見ながら暮らすみたいな、そういうのもしていかななくちゃいけないですね、掘り起こすのを。頑張っていけばと思います。

じゃ、佐藤委員、よろしくお願いします。

【佐藤委員】

今回、外国語教育ということですので、基本的には、先ほど教育長が言ったように、今の世の中が、当然日本で育った人間が海外で活躍するというグローバル化もあれば、一方で、国内で優秀な人材を確保するために海外の人材を確保する。そうするために必要なこととしては、受け入れる側がやっぱり外国語ができなきゃいけないというのがあって、そういった面で、外国語教育というのは、将来にわたって非常に必要なことだなどというふうには思っています。ただ、外国語をしゃべれるだけじゃなくて、相手の意思といいますか、思いが伝わるようなコミュニケーションというのは外国語教育の中で非常に必要なことだと思います。グローバル化というのは、世界のいろんな先進的な知恵を持った方の意見を我々のほうに取り入れたりとかする上でも非常に必要なツールだなど実感をしているところです。

そういった必要なものを小学校や中学校の教育からするということですが、私、言葉として非常に好きだなと思ったのは、外国語活動というのがありまして、それは、結局は、これまで外国語教育というのはしてきたと思うんですけど、それが実際としてできなかった点というのはあって、それが、先ほど来から話がありましたように、一方的に文法や文章を覚える、単語を覚えるだけではなくて、いろんなふだんの活動の中で外国語を使うことによって、外国語も上達するし、そして、相手の意思、考え方や理解ができるということまでつながってきたかなとは思っています。

じゃ、現実的に、授業が増えることによってどうやって改善していくかということは、具体的な案はないですけど、私個人的には、やっぱり英語は日々なれることが必要だと思うので、短時間でもいいのでどこかの時間で、それがしっかりとした授業じゃなくてもいいので、先ほど話がありましたように、歌を歌うとかいった形でもいいので、常になれていくのが必要ではないかなとは思っています。

そういったことをしながら、幼少期のころから英語に学び、そして、文化を学び、それが将来的につながるかなとは思っています。

【市長】

確かに、小さいときに学校でカーペンターズを聞かされたなど今思い出しましたね。カーペンターズ

から入ったんです、スタートは。多分、そういうのがきっかけになりますよね、触れるといいですかね。

【佐藤委員】

先ほど、ちょっと産業観光の話がありましたけど、やっぱり外国の方は、日本の文化とか歴史の長さというのに非常に興味がありますね。それをうまく伝えられないという我々のほうも、思いがですね。

【市長】

みそ文化、しょうゆ文化というんですか、この深さを伝えるための英語という、それを使うというのは。

【佐藤委員】

ただ訳すだけの英語じゃないですからね。

【市長】

やっぱり経営者、佐藤委員は特に企業を経営されて、グローバルにも展開されるといいますか、海外にも商品展開されているようですが、やっぱり英語、例えば、次の新しい職員を採用するときとか、そういうのも気にはされるんですか、今は。

【佐藤委員】

そうですね、英語を話せたほうがいいなと思いますけれども、実際には、6カ月間ぐらい英語の塾に行かせてなれさせることしかできないんですね、海外赴任前の。やっぱり実際行ってからいろんなことを自分で学んでいるというのが実際ですね。単語も、当然学校で学んできたような単語じゃありませんので。ただ、やはり、お話がありましたように、いかにコミュニケーションがとれるかというのが一番大事だと思うんです。例えば、海外赴任した者でも、早く英語を覚える人間というのは、そのまちとか地域のコミュニケーションに自分から入っていける人間なんですね。そういった人間がやはり一番早く覚えるかなという感じですね。

【市長】

今、グルテンフリーでほんとうに海外から、グルテンフリーソースですからね。たまりは今すぐいからです。そういう意味では。よろしくお願いします。

じゃ、次、松岡委員、お願いします。

【松岡委員】

大学の話をしていただきますと、文科省から大学入試改革をせよと言われていています。それには、ちょっと先になりますけど、新学習指導要領で学んだ子どもたちが入ってくる時の試験をどうするかという議論。英語について言いますと、現在は、読むと聞くの評価しかしていないんですね。ペーパーテストとリスニング。将来的には、読む、聞く、書く、話す、4つの技能を評価するような入試の改善をなさと言われていています。

それともう一つは、現在のセンター試験にかわって将来は、共通テストといいますけれども、段階的に外部試験を導入するように。外部試験というのは英検とかTOE I CとかTOEFLとか。それで、英検何級だったら何点相当とか、例えばですよ。あるいは英検何点だったら何点加点するとか、そういう議論がされています。そこでちょっと心配になるのは、早くから準備する市町村とそうでない市町村、あるいは高校ですけれども、そういった差が出てしまうんじゃないかということですね。

それで、市長さんには耳の痛い話になりますけれども、松香委員をリーダーとして英語の教育上の工夫ということでかなり改善はされると思いますけれども、一方で、設備とか教える人材にどれだけ投資するかによって差が出るような教科かなと思うので、その辺は桑名市でもよく考えないといけないんじゃないかなと思います。

【市長】

確かに、それこそ生まれたまちのやり方でそんなところに差が出るということは許されないことだしね、少なくとも桑名が先んじて取り組めるようにやっていければと思っています。外部試験がどういうものになるのかというのはまだ決まってきていないんですか。

【松岡委員】

まだ固まってははいないです。一応、方針というのが出たんですけど。この7月ですけれども。

【松香委員】

大学の場合は、4段試験で、TOEICとかいろいろありますよね、国連英検とかね。いろんな今チヨイスを上げていますよね、でもいいと。センター試験も英語ですよ、これから。

【松岡委員】

当面は大学で選べるようになってはいますけれどもね。すでに外部試験を導入している大学もあるんですけども。

【松香委員】

でも、そういうふうに4技能という方向は変わっていかないと思うので、高校入試がどうなるかが今この部会では一番大事なポイントかなと思いますけど。

【稲垣委員】

そういう意味で、ぜひやっぱり桑名で英検が受けられるという状況に。

【松岡委員】

それは大きいと思います。

【市長】

今はどうなっているんですか。今は受けられない。

【教育長】

今は、そういう会場はないので桑名で受けられない。

【市長】

どこに行くんですか。名古屋ですか。

【教育長】

四日市か名古屋ですね。ですので、ここでも前からすごく話題になっているんですけども、何とか桑名で実現できないだろうか。

【市長】

今、受けられないんですね。

【稲垣委員】

そうなんですよ。せっかく勉強しても。

【市長】

でも、それはやっぱりそういう環境があれば挑戦しようという子も増えるでしょうね、それはね。今は全くそれに触れる機会がないということですね、それじゃね。

【教育長】

そういう環境をやっぱり整えるべきだと思いますし。

【松香委員】

教員の負担の問題というのがあって、会場校になると教員がやらなきゃいけないというのをどうやって減らすかとかいう問題で。今は大橋学園。

【市長】

ああ、四日市ね。

【教育長】

そうですね、大橋学園さんが会場になってみえる。

【松香委員】

そんなところがやっているらしいですけど、受け皿としては私立学校とかが多いそうですね。

【教育長】

この近辺でも、四日市さんとか伊賀市さんでも、公立ではやっていないんです。

【市長】

そうなんですか。

【松香委員】

日曜出勤とかしなきゃいけないくて。

【市長】

時間外になっちゃうね、そこが。なるほど。でも、それはそういう環境面は整えてやりたいですね、そういう意味ではね。

わかりました。今日はいろんなご指摘もいただきましたので、全部やれるかどうかはちょっとまたあれですが、しっかりとこれを受けとめさせていただいて、ほんとうに、まず遅れないようにといたしますか、桑名の子もたちも、まず先頭に立ってやっていってほしいという思いがありますので、しっかり取り組んでいきたいというふうに思います。

続きまして、事項2に移らせていただきます。道徳教育についてを議題といたします。事務局から説明をお願いいたします。

【指導課長】

失礼いたします。それでは、資料の10ページから11、12、13が道徳教育にかかわる資料になっておりますのでご覧ください。

今ご覧になっている資料につきましては、昨年12月に文科省から、いじめ防止に向けた特別の教科道徳の指導方法をまとめたものということで示されております。これまでも、道徳教育は、学校教育全体で行う教育として全体計画を各学校で作成し、年間指導計画を立てて取り組まれてきています。道徳の授業での道徳的価値の理解をもとに、自分自身を振り返り行動に結びつけていく学習を学校教育全体で展開するという事を桑名市の学校では大切にできています。そうした道徳教育のかなめとなるのが道徳の授業であったことに違いはありません。

しかし、大津市のいじめ事件を発端にして道徳教育のあり方が問われました。これまでの道徳の授業は、読み物教材の登場人物の心情理解やわかり切った道徳的価値を押しつける指導に終始して、いじめなどの現実の問題に対応し切れていなかったのではないかという反省があり、道徳を教科化して、考える道徳、議論する道徳の授業へと質的転換を図ることになったわけです。

道徳的価値の理解をもとに自分自身を見詰めて、物事を多面的、多角的に考えて、自己の生き方についての考えを深めるよう問題解決的な学習を取り入れた、いわゆるアクティブラーニングの授業、つまりは主体的、対話的な深い学びとなるようにということで、そんな授業に変えなさいということになってまいりました。新たに教科書も配付されますので、各小中学校では、教科書も反映して、各校の状況も踏まえた道徳教育の全体計画と年間指導計画の検討に加えて、これからは評価についての研修も必要になってきております。

資料の13ページについては、道徳科の評価についての報告になります。今までの道徳では評価は行っておりません。これから始まる道徳科では、発言や会話、作文やノートなどを通じて、毎回の授業ではなくて、学期ごとや年間を通じて児童生徒の様子を見ることで学習状況や道徳性の成長を数値ではなく文章で記述していきます。この評価によって子どもたちが自分の成長を実感して意欲の向上につなげていくことが大切だというふうに国から指摘をされているところです。

以上です。

【市長】

ありがとうございます。

事務局から説明がありましたので、皆さんからご意見を伺いたいと思います。これも教育長のほうから。

【教育長】

じゃ、私のほうから皆さんに話題提供という話でございますけど、ちょうど午前中に今日は教育委員会をさせていただいたんですけども、その中でも道徳の教科書の選定について議論を大分していただいたということでございますけれども、やはりどの教科書もよくできている。さすがだなということで、

皆さんうなずいてもいただいていたんですけれども、ただ、かなり厚いんですよ。ですので、35時間という授業案が決まっていますので、どういうふうにこれを指導していくかということは非常に難しいなという話をしてもらっていたんですけれども、その中で、勢いになると読み本に追われないかというのが一番危惧を皆さんしていただいでいて、私もその辺を思ったんですけれどね。あとは、35章あるんですけれども、徳目というんですが、21とか、学年によって違うんですけれども、道徳的価値がその時間で完結なんです。だから、正義感を持ちましょうと書いてあったら、その時間で、1時間で学習するというふうになりますので、それは子どもたちにどうなんだろうなど。だから、うまくやらないと、価値観の押しつけをしてしまわないかなというところをすごく感じていましたので。

それと、もう一つ議論になっていましたのは評価の問題でして、当然、数値でやるわけではなくて記述式なんですけれども、でも、それはかなり難しいですよという話が出てきたんですけれども、もう少しそのあたりも皆さんで見回していただくとありがたいなと思います。

【市長】

記述は記述でまた違う難しさがありますよね。

【教育長】

どんな観点で記述するかということが議論になっていたんですけれどね。

【市長】

そういうものを踏まえてまた皆さんからご意見をいただきます。では、稲垣委員、お願いします。

【稲垣委員】

私は、小学校のときは道徳の授業が大好きだったのであれなんですけれども、多分、今回の道徳の授業が入ったベースに大津のいじめとかがあったと思うんですけれども、いじめありきの道徳は、私は個人的にはちょっと違うと実は思っていて、そうじゃないと今も説明していただきましたが、もう一步深い、何か人間性の部分だったりとか、私たちは何を大事に、生きるとはどういうことなのかとか、どうやって社会の中で生きていけばいいのかとか、多分そういうのを教える場なんだと思うんですよ。それはすごく日本の教育の中で私は根づいていると、昭和っぽいんですけれども、あるじゃないですか、「二十四の瞳」とか、ああいいうイメージ。私は脈々とあるものだとか誇りにすごく思っているものでして、ただ、行き着いちゃうのは、先生がほんとうにこの道徳をどう教えるのかという、さっきも、教科書偏重になってしまったのは、多分教え方がそういう与える教育になってしまっているからだと思うんですよ。ほんとうに、コーチング的というのであればですけど、今、いかに引き出すか、いかに考えさせるかということだと思うんですけれども、それは実は英語の授業と結構クロスしているような気がして、実は私は、今、一生懸命頑張って、ある英会話学校に通っているんですけど、英語は、必ず何とかと言うと、絶対、これは間違っている、オー、グレートとか言ってくれるじゃないですか。反応があるんですよ、英語の文化は。反応の文化ですよ、英語というのは。日本は反応の文化ではないというか、それは、子どもの授業参観とかへ行っても、はい、何々君。何とか。はい、じゃ、次とかという。反応で、おお、いいねとかというので、ちょっとそこでグレートとか言ってみるとか、道徳も、いいね、それでどう思うのかという教え方は、多分英語にも通じるし、道徳にも通じるし、多分プログラミングとかでも、えっ、これどうやってやるの。僕はわからないけど。子どものほうが全然詳しいですからプログラムなんかは。へえ、こうやるんだねとかとやる、何かその先生の教え方。さっき佐藤委員も言ってくれたコミュニケーションだと思うんですけれども、そういうのさえわかれば、道徳はもっとほんとうに役に立つものになるんじゃないかなと思っています。

あと、もう一つ、道徳に関しては、ただ、幾ら学校で頑張っても変わらないと思うんですよ。なので、道徳の教科書も読ませていただき、個人的には、例えば、家庭の宿題にしたりとか、これを親子で読んでくるとか、親側でも感想を書いてもらうとか、道徳の、せつかくだから家庭学習とかにも巻き込んだりとかして、家族も変えていけたらいいんじゃないかなというのは思っています。

【市長】

経営者の方は結構道徳を大事にされる方が多いなど、私は今までお会いするとそういうのをより感じ

るんですけども、確かに、自分でずっと考えているんですね、そういうことをね。だから、それをし続けていることが道徳になっていくとか、何かそういう感覚の経営者の方は多いなと最近思いますので、大事にされているんでしょう。考えていくことでどんどん道徳化されていく部分があるなと思いますね。

【稲垣委員】

そうですね。

【市長】

また、どうやって引き出してくるのかという、これもまた、先生のスキル、どういうふうにつくっていくのか、先生がスキルを育てていくのかという問題と、そして、何といても、学校だけでは変わっていかない。道徳で公共とかそういうことをどうやって考えさせるか。やっぱり親も変わっていかないと、子どもだけではやはり変わらない部分もあると思いますので。わかりました。ありがとうございます。

では、松香委員、お願いします。

【松香委員】

大きく言えば、小学校、中学校の教育なんかは全部道徳だと思うんですね。だから、それが教科になって、教科書ができて、15個話があるとか、そういうふうなのを全部こなさなきゃいけないという考えが、それを桑名市とかが、5つぐらいやればあとはいいですよとかちょっと言う。それより、それは5つぐらいはやったほうがいいかもしれませんが、例えば、すごく子どもたちが聞いて涙を流すような話をできるような、いじめから立ち直った人の講演会とかありますよね、何かそういうのとか、すごく命を大事にした話とか、そういうことで、私も子どものときにすごく感動した話は幾つかありますよね。だから、そういうのに置きかえていいとかね。これをやったことにする。ここをやったことにするには、この人の講演会をやって3回やったことにするとかね。そういうふうにもう少し柔軟にやらないと、これを読ませて、強制的に意見を言わせて、はい、終わりというパターンになるのはどうかなとすごく思いますけど。

我田引水ですけど、英語とかでも道徳とかは幾らでもできて、簡単な言葉で、どんな友達が好きですかとか、この人のいいところは褒めてくださいとかよくやっているの、そういうことは何の教科でもできるかなと思いますけどね。だから、そんなに、ばちっと35時間やって、ばちっと35回教えてというふうにならないでいよいよ教育委員会に言ってあげると、現場も楽かなというふうに。だめでしょうか。

【市長】

結局、だから、教科書に合わせてやっていくだけじゃないよねということですね。

【松香委員】

でも、教員の人は真面目だからそうなるんですね。

【市長】

そうですね。

【松香委員】

教科になった途端に全部終わらせようとするから、やらなくてもいいんじゃないとか言おうものなら、教育委員会に怒られるとまず言いますよね。そうすると、教育委員会はなぜやるかという、文部省に怒られると。怒られるという不思議な文化があって、でも、そうでもないんじゃないですかね。教科書というのは1つの指針だから、それを使って何かすればいいわけですよね。

【教育長】

松香委員がおっしゃるように、今のまま何も手を打たなかったら、やはりその状況になると思いますので、だから、積極的に教育委員会からもうちょっと柔軟にいきましょうという話をしていかないといけないと思いますし、稲垣委員がおっしゃったように、やっぱり家庭とやることは大事かなと。一緒に読んでくださいよということなんかもあると思いますし、それと、これも英語と一緒にかもしれませんけ

れども、外部の人たちを呼び込むというの、やはりこの道徳でも大事じゃないかなとは思っているんですけどね。

【市長】

外部という、さっき言ったような、いじめから立ち直ったとか。

【教育長】

それもありますしね、それから、当然、このへんですと、伊勢湾台風の経験をされた方に、どういうきずなとか、みんなで助け合ったのかというお話とか、当然戦争のお話もあると思いますので、そんなのを、地域ごとでそれぞれ違っていると思いますので、伝統を守るとか、一緒の方々でも、道徳的な部分というのは非常にあると思いますので。だから、あまり教科書の範疇だけにとどまらずにやったほうが、かなり勇気が要るんですけどね。

【松香委員】

まず、稲垣委員と佐藤委員に講演してもらえばいいんじゃないですか。企業においてどういう道徳観念が大人になっても必要かと。これが人間の基本ですよみたいなのがあるじゃないですか、会社とかを動かしていれば。そこら辺とかを言って、子どもたちがふーんと思うかもしれないけど、やっぱり社会に出て自分はやっていけるのかなというのが一番大きな課題だから、そこら辺で具体的に。

【教育長】

どうやって生きていくかという話ですからね、これは。

【松香委員】

いいんじゃないでしょうかね。

【教育長】

教育委員というのはそういう役目もありますので、ぜひ。昨年もやっていただいた方が何人かいますので。

【市長】

今も、経営者の方とかもそうだし、郷土愛みたいなことだって道徳ですよ、そういう意味ではね。例えば、宝暦治水の話とか、やっぱり鹿児島で薩摩の人にすばらしい堤防をつくっていただいて我々は平和な暮らしができるんだけれども、意外と桑名の人知らないとか、この間、平田鞆負の263回忌とかでも、意外と来ていないんですよ。すごくお世話になってということとかも道徳なんですよ、ほんとうはね。歴史でもあるけれども、そういうことを学んで、263年前にそれがあったから我々は今ここで暮らせるみたいな、ありがたいな、感謝みたいなね。いろんなことが、確かにそうやって言われてみると道徳ですね。

【松香委員】

全て道徳だと思うんですね。毎日緑の旗を振ってくださる方にお話をさせていただくとか、そういう生活に根づいた。道徳の教科書をちらちら読んだら、高齢者、おばあちゃんに気持ち悪く傷つけてしまったみたいなものがあるんですけど、じゃ、おばあちゃんに、本物に出てきてもらって、どういうときに孫にこういうことを言われると傷つくとか、そういうことを直接言ったほうが、教科書を読んで、どこまでほんとうにそれを感じてくれるのかというのは今の子にはありますよね。映像化してあるか、本物、ライブ。

【稲垣委員】

本物、いいですよ。

【松香委員】

ライブ、好きですよ。

【教育長】

本物に勝つものはないと思いますし。今の中学生の主張というのでよくやってもらっているけど、あの中にも、そういう今のおばあちゃんの話とかいろいろ、自分の家族の話をつづったがあるので、そういうのを教材にしながら本物に来てもらうというのも非常にありかなと思うんですよ。だから、今、

推進校で研究もしてもらっているんですけども、そういうものを含めて、それこそ、英語の桑名プランじゃないですけども、道徳も桑名の味つけをしたほうがいいのかなという気はしていますけどね。

【市長】

ほかの教科も、全部、これだけアクティブラーニングと言っているのに、道徳だけ本を読んで終わりとなると、それは変ですよ。

【教育長】

ただ、先ほど申し上げたけれども、このまま置いておいたらそうなりそうな気がしますね。

【市長】

それじゃ、早目の対処をきちっと考えていかなきゃいけないですね。

【教育長】

ちょっと勇気を持ってやらないと思っていますから。

【松香委員】

教育委員会が保障してあげればいい。だめですか。現場の先生はすごく真面目で、とにかく私も教科書、「Hi, friends!」があるんですけど、好きなどころだけをやればいいんじゃないですかとか言うと、しーんみたいな、ええ。

【安藤委員】

文科省から、一々、前期の道徳で何時間やりましたか、年間で何時間やりましたかとか。

【松香委員】

だって、講演者を呼んだら、それをやったことにすればいいわけだから。

【安藤委員】

そうなんですけど、その辺、何かものすごくぎっしり報告を求められたりとかそういうのがあって。

【松香委員】

でも、子どもも大変ですよ。朝から晩まで、椅子に座って一方的に聞くのがまた増えるみたいな。

【教育長】

文科の調査は細かいんですよ。

【安藤委員】

どんどん四角四面な感じになってきていますよね。

【教育長】

例えば、教科書を持って帰ったんですかとか、それから、何時間これを実施しましたかというのは、必ず聞かれると思うんです。ただ、今言われたように、文科省さんも、いろんなことを代替しながら幅広く弾力的にやりなさいよとは言っていたので、そのあたりは十分考えられるかなとは思っていますけど。

【松香委員】

教科書を持って帰りましたかと言われたら、じゃ、うちに帰って親と一緒に読むように指導しましたともう一歩先をつければいいんじゃないですかね。

【教育長】

そうです。そこをやっていけばいいかなと思いますので。これからは、こういう形の、それこそ道徳だけじゃないんですけども、新しい学習指導要領になるためには、うちでいうと指導主事の役割が非常に重要になってきますので、その人たちにメッセージみたいなことを、今ここで話し合ったことを伝えていただくようなことを進めさせてもらわないといけないと思っていますんですけどね。

【市長】

アクティブラーニングな道徳にしてもらって。それでいいんじゃないですか。

【教育長】

ぜひその方向へ。

【市長】

ぜひ。その流れで、じゃ、安藤委員、お願いします。

【安藤委員】

その流れで。教科書を見せていただいたときに、道徳は、考えるとか話し合うとかということを中心としていく、どんなんだろうと思ったら、わりと今までの副読本の変わりがない感じだなというふうには思ったんです。やっぱり、お昼も食べながら話は皆さんとしていたんですけど、教科書というか、文字に書いたものがあれば、それを読んで、それを書いてとかいう話になっちゃうので、それを離れて、出ていくとか、みんなで何かするということがなかなか難しい。それは先生の裁量になってくるのかなみたいな話をしていたんですが、資料のところ、例えば、11ページとか12ページにいじめの防止に向けてこんな授業をしていく、こんな授業をしていくと書いてもらってあるのをきのうちょっと読んでいたんですけど、こんなの、やっていた、やっていたと私は思うんです。今どき、テレビを見せて何とかという感じはないですし、逆に、テレビを見て、道徳、育った私たちでもちゃんと生きているので、別にこうやってやったからどうということはないじゃんみたいなふうにも思いますし、現場は現場で、ありきたりの話にならないように、例えば、モラルジレンマとか、一緒に競争していてこけた子がいた。その子をあなたなら助ける？ それとも、やっぱり競争だから自分で頑張って走る？ どうする？ みたいなことで、正解のないのをみんなで話し合うとか、そういうのだったらみんな意見が言えるよねみたいな、そんなことを工夫してやってきているんですよ。やっているのにみたいな気持ちはあってというのが1点です。

それから、もう一点は評価の話で、評価も、そういうのを踏まえて考えると、13ページにありますけど、単元単元の細かいことではなくて、まとめた大きなことで考えなさいとか、それから、児童が多面的、多角的な見方へと発展したのを特に顕著と認められる具体的な状況を記述しなさいとかって、30人、40人いたら、一人一人はなかなかそれは無理だろう。今、文章表現は、高学年は、総合的な学習があって、外国語活動があって、大体、年度末が多いんですが、所見というのがありました。それに道徳となってくると、ほんとうに、書くのはやっぱり残るので、とても緊張してやれよと私たちも言いますし、時間もかかるので、これはなかなか難しいなという。所見の中で、顕著な、道徳的な感じでこういうふうに変ったというのがあったら書くという程度ならできると思うんですけど、1つ教科を設けられると難しいなど。それを今さら言ってもなかなかという話ばかりではあるんですが、感想です。

【市長】

それはできないんですか。所見の中にというふうにはこれは読めないんですか。そういうふうには読めない。道徳は道徳で教科なので、そこだけで評価をしろということですか。

【安藤委員】

移行期間のときはそういう感じでもいいけれどもみたいな。

【市長】

最終的には、結局、教科として評価をしなくちゃいけないんですね。

【教育長】

ただ、あれはいわゆる連絡表、「あゆみ」とかいつているものですから公文書ではないですよ。学校が発行する通知ですから、学校が工夫しながらアレンジはできると思いますので、所見欄というところをなくすことはできますよね。それで、道徳のところをしっかりと盛り込めればという形もできると思いますので、できるだけ保護者の方々が信頼してもらおうとか、よく子どもの様子をわかっているような形に変えることはやぶさかでないと思うですよ。ただ、桑名の場合は、印刷するとき、各学校1つずつやっているとお大変だし、効率的ではないのでというので、全部の学校がほとんど同じようなのでやっているんで問題があるんだと思うんですけども。前に、それぞれの学校で特色ある通知表のつくり方をしたんですけども、そのときは大変手間がかかるというか、そういう状況がありますので。それでも、ある程度の大まかなところだけつくっておいて、あとはそれぞれの学校でという向きもあると思うんですよ。だから、できるだけ労力を使わずに、そして、信頼のできるものをつくってあげば。

【市長】

今までもやってきているのにねというのはね。

【安藤委員】

そうです。それで、さっきから話が出ていますけど、先生方は真面目なのでといって、あそこもやっている、ここもやっているといって、うちもやらないといけないみたいな感じになってくるので、そういう雰囲気というのが。

【市長】

働き方改革の援助をいかに出すかですね、これはね。いかにやらないかという大変ですけど、やらなくもいいことはやらないみたいなことができる。

【松香委員】

いじめの問題はもちろん大きいこともよくわかるし、こうやってすごく扱って、でも、今、障害児が増えていたりとか、クラスの中でどうやって対処するかとか、あと、外国籍の子が増えていたりとかいうような問題のほうが大きい場合もありますよね。だから、もうちょっと、教科書にこれが載っていたから、載っていなかったからというんじゃなくて、その学校ごとに問題になることってありますよね。でも、今、障害者は世界中で増えていて、障害児童というか学習、大変ですよ、先生たちは。そういう子たちが、クラスでいい雰囲気ができると先生も助かりますよね。というようなことも考えていただいているのかなと思っちゃいますけど。外国籍の子も、やっぱりいたら対応が大変だし、でも、やっぱりみんなが温かくしてあげることが一番いいけど、こちら辺も多分地域的に、愛知県とかはすごいですよ、静岡もいっぱい増えてきて。

【教育長】

三重県とか桑名市もすごく増えているんですけども。

【松香委員】

もうどんどん増えますよね、これから。

【教育長】

だから、そのこの拠点の学校の道徳というのはまたあると思うんですよ、国際理解のところも含めて。それはいじめに特化するんじゃなくて、お互いみんな人権を守ろうというような形になってくると思うんですけどね。だから、なかなか、松香委員がおっしゃることも含めて、奥深いし、このまま放っておくことが一番いけないかなと思いますので、そのことを積極的に教育委員会としても入っていかないといけないと思います。

【市長】

そこはぜひお願いします。

では、佐藤委員、お願いします。

【佐藤委員】

先ほど、会社の経営と道徳という話がありましたけど、逆に言えば、会社経営の道徳というのは簡単どころが1点あって、それはコンプライアンスと言われる、法律が柱にきちんとあるということですよ。だから、従業員の人たちはこの法律を守るか守らないかというのが1点ある。それが道徳といえそうですよね。それがいいか悪いかという判断の基準になるというところはあります。

もう一つの柱としては、格好よく言えば経営理念といいますかね、例えば、食卓に笑顔を届ける企業でありますとかということになると、実際にその商品を買ってくれた方がほんとうに笑顔になって喜んでくれますかということを考えて物づくりをしましょうとか、それが1つの道徳といえれば道徳の教育というか、しみ込まれていくものかなと思います。

ですから、道徳の、仮にいじめの問題であるとするならば、1点目の法律できちんと分けるということとは非常に難しいと思うんですけども、一方で、2つ目の相手の身になって考えるという点では共通する部分は非常にあるかなというのは思います。

私には小学校の子どもがいるんですけども、ちょっと先走っちゃいましたけど、ページ11の絵を見

せて、2番にあるんですけど、どこが問題だと思うといったときに、大体、やっぱり、ここは問題だというところは子どもはわかっているんですよ。でも、わかっているんだけど、実際、それが起きたときに自分が何をやるかということまではやっぱり行けないなというのが1つ大きな課題だなと思いましたね。

【市長】

わかっているんですよ。

【佐藤委員】

ええ。ここでいう、ひとりぼっちになっているとか、こそこそ話しているとか、じゃ、その子に対してどうやって声をかけてあげるのかということところがやはり必要なところかなと思いました。

【市長】

結局、アクションの部分がやっぱりみんなできないんですよ。わかっているてもできないという、一番そこが難しいところ。

【教育長】

わかっているやらないと、傍観者になっちゃうんですね。そうすると、加害のほうに入ってしまうということは非常に問題なんですよ。

【市長】

結構、これ、最初の英語の部分に結構近くなってくるのかなというか。いかに明るくみんなに声をかけられるかとか、そういうことにつながっていくと思うんです、実際はね。

【松香委員】

全教科同じじゃないですか、大きく言えば。これからアクティブラーニングなんだし、みんなで考えて、みんなで解決する。

【教育長】

学校というと、人間づくりですからね。それぞれどうやって付き合い方なんかを学んでいってもらいかというか。

【松香委員】

どれだけ傍観者をつくらないというか。主体的に。

【市長】

まさに主体的にということですね。

【教育長】

そうですね。主体的、対話的で来ましたので。

【市長】

この教室を運営しているのは自分たちだという意識があれば、変わってきますよね。

【教育長】

そうですね。大きいですね。

【市長】

学校の先生のためのクラスでもないという、動かすのは自分たちがつくっていくんだという、そういう意識が芽生えていって、そのときに動けるようになっていくと、ほんとうの意味でいじめがなくなっていくんでしょうね。またそれは大きな問題ですね。ありがとうございます。

では、松岡委員、お願いいたします。

【松岡委員】

道徳の教科化に当たってはいろんな議論が起こったわけですけども、教科書を実際に見せていただくと、これまで既に取り上げていた定番のお話があちこち散りばめられていて、そんなに違和感がないものですね。それと、結構おもしろいんですよ、改めて読むと。それを読んで考えさせるような工夫が教科書はされているなと思いました。その中で、聞くだけじゃなくて自分たちで考えて行動ができる、そういうことができるんじゃないかなと感じました。

それと、先生の考えに生徒たちを染めるという意味ではなくて、評価については、一面的な見方から多角的、多面的な見方へというふうなことで、より深めていくということを書かれていて、ここら辺を誤らなければ、いい道徳の授業になっていくんじゃないかなと。

日本というのは、道徳心の醸成という意味では結構成功している国だと思うんですね。震災なんかがあっても、ちゃんと配給、列を守るとかそういうのではあるんですけど、ただ、そうではない人たちもいるということで、子どももいるかもしれませんが、そういうのをさらに日本らしい、誇れる日本人の醸成につながっていくんじゃないかなと私は思います。

【市長】

東日本大震災のときのいろんな映像ですとか写真とかでもやっぱり大分特集されていますよね、そういう部分がね。暴動みたいなのが起こらないといえますかね。これはやっぱり日本の特筆すべきすばらしい点だと思いますよね。そういうのもうまく、また醸成させていけるような道徳教育になるようにしたいなと思います。ありがとうございました。

では、続きまして、事項の3つ目、プログラミング教育についてを議題といたします。事務局から説明をお願いいたします。

【指導課長】

失礼いたします。3点目、プログラミング教育について話をさせていただきます。

今、身近な生活の中に人工知能AIを使って、コンピューターやプログラミングということはかなり普及してきていると思います。コンピューターに命令して意図する活動をさせるということ子どもたちにも経験させていく。そのための基本的な言語活動として、思考、判断、表現というのを養っていくのが小学校からのプログラミング教育のあり方なのかなというところで、資料には14ページから記述させていただきます。

動画で何かわかるものを体験的にということで探してきましたので、一度やってみますので、見ていただければと思います。

これは、NHKのEテレでつくっておられる「Scratch」というプログラミング教育のためのホームページです。今、ここに水槽があるわけなんですけれども、スタートボタンを押してみますと、こういうふうの中のカイが動き回っていますが、黄色の魚を、子どもたちにこの泳ぎ方とかを変えていったらどうなるのかなとかいうことで考えさせるわけです。例えば、ここに、端っこに行ったらはね返るといふ命令がもう既に組まれているわけです。これを抜きますと、こういうふうな動きになる。これは困るよね、カイさんのようにしたいよね、じゃ、どうしたらいいということ子どもたちが考えながら、ここにまたこの命令をはめてやると、そうすると、魚が戻ってきましたけれども、今度は、端っこへ行ったときに、向きを変えますよというところで、こうやって命令を変えていくことで、すぐに画面でわかりますので、コンピューターでやっていると、子どもたちはそういうことがわかる。

例えば、次、魚の大きさを変えてみようかというところで、真ん中辺に1つボタン、Sというボタンに命令を組み込んでいます。大きさを28%にする。x座標、y座標でちょっと難しいことをやるんですけど、そういう命令をボタンに入れておくと、そうすると、私がここでSのボタンを押しますと、魚が小さくなるわけです。ああ、やっぱり戻しましょうという場合には、次に、またもとの大きさ、大きさを大きくしたいボタンがAに組まれているので、今度はAを押すと、ほんとまた大きくなるというところで、この組み合わせをいろいろ子どもたちが考えていくと、いろんな、これは水槽の中の魚を考えているわけですが、例えば下のところにフカヤラ人面魚とかありますけれども、これも泳がせてみようということだったら、これも組み込んでやっていく。その命令の流れをこの順番にぱーっと入れていく。順番にいうと、回転方向を左右のみにする。ずっとこの動作ということで、動かす、端に着いたらね返る、コスチュームは色だと思えるんですけど、何秒待ってからね返る、これをずっと繰り返す。ずっと繰り返すという命令がここに組まれているので、今、この魚がこうやって泳いでいるというところで、こういうのを組み込みながら、考えながら話し、これは個人でもできるし、グループでも話をしながら、思考回路をめぐらせていって、水槽の中でこういうふうな魚が泳ぐ世界をつくりたいと

いうところを勉強していく機会を小学校から、小学校ではいろんな教科を使ってやっていってくださいねというところが今その資料に書いてあると思います。

これはコンピューターを用いての例ですので、実際にプログラミング教育をやるとするとICT環境についても整備が必要になりますので、次の15ページのところには、4カ年計画ということで、以前にも出しましたが、文科省が出した教育のIT化に向けた環境整備4カ年というところで事例が挙げてあります。

ちょっとうるさいのでとめます。とめるのも、ボタンに書かれていますので、これでとまるとありますので。

ICT環境につきましては、いろんな理想的な環境がそこに上げられてきていますが、17ページを見ただけですと、理想的には、コンピューター教室や普通教室のハード整備だけではなくて、例えば、校務用コンピューター、それから、ICTの支援員という指導できる人材配置とか、目標とするICT環境のイメージがそこにあるわけなんですけれども、プログラミング教育の推進には指導者、人と、それから、ハード面、両面の整備が非常に大事なことなのではないかということを考えています。

以上でございます。

【市長】

ありがとうございます。

事務局から説明がありましたので、皆さんのご意見を伺いたいと思います。これも、教育長から。

【教育長】

じゃ、私から。今ちょっとありましたように、そういうプログラミングの概念を子どもたちに、何か命令するときちょっとそれに返ってくるんだとか、何のためにやるんだということをしっかりとつかませるのが大事なのかなと思うんですけれども、それにしても、ICTの環境がかなり必要になってくるとなると、財政的なことも頭を私なんかはよぎるんですけれども、ただ、今の桑名の教室環境を見ますと、各学校で、例えばプレゼンテーションするときにも、ICTが使いにくい状態にあるので、結局、前のときに配置したのが、中学校でも、それぞれワンフロアに1つの電子黒板という形で、プロジェクター等もそんなに整備されていないというところ。これから一人一人のパソコン、端末もそろえていくのが大事ですし、タブレットと一緒に活用もあるだろうと思うんですけれども、みんなで学習するときに、今のような、こうやって見られるような状況を各学級でつくれるかなと、それを1つ強く思っているんですね。

それと、やはり先生の中にも、非常にプログラミング教育に対して苦手感がある方もかなりみえるので、やっぱり今のお話、こういう素材とか授業をたくさん見てもらって、見るだけじゃなくて、自分でそれをやってもらう、その繰り返しが一番指導者としての育成にはなるし、そのことが子どもたちのレベルを上げることにつながるのかなと思いますので、人的なもの、それとICTの環境も含めて、限られた財政の中ですから、何が一番効果が上がるのかを研究していくことが大事かなと今のところ考えているんですが、そんなご提案をさせていただいてご意見をいただきたいなと思います。

【市長】

そこを踏まえていただいて、稲垣委員。

【稲垣委員】

私は、今、実はいろんな企業さんでインタビューというのをさせていただいて、リーダーだけではなくて、いろんな社員さんのインタビューとかをさせていただいて、多くの人は、対処力、処理力とか対応力、その場の何とかというのはすごくうまいですね。でも、今言ったような、思考力だったりシミュレーション力だったり構築力だったりというのは、企業さんも実はすごく能力は割合が少なく、仕事が会社でいうとうまくいく人とかそういう人なんですよね。だから、この能力は確かに必要だというのはよくわかります。ただ、これがほんとうにこのプログラミングで身につくんだろうかという率直な今疑問はすごく思っていました。この映像を見てしまったら。もちろん構築力とかは、ある程度の訓練は実は必要だと思っていて、何もしないと、人は対応力で終わっちゃうんですね。だから、

この要素を取り入れるのはすごく大事で、じゃ、何を学校現場で準備したらいいだろうかと思ったときに、もう一步の考え方として、ITリテラシーでしたっけ、要は、ITがとても使いやすい子どもに育てていくという発想で、小さいときから多分パソコンやらあれになれようということだと思うんですね。というのがこの多分導入だと私は思っていたので、それはそれですごく大事で、やっぱりそういうのを使ってやるんですけど、でも、うちの子とか、教えなくても私よりも詳しいんですよ、当然ですけど。たったかたったかやるじゃないですか。これは教えるものでもないなとも思ったりするので、ほんとうにこういう思考力で一体何が必要なのか。

もう一つは、個人的には、やっぱり環境は大事なので、17ページにあるような、ほんとうに、最低、電子黒板とかコンピューター1台とか、昭和50年代の私がいた小学校のときの風景と今とあまり変わらないというのだと。

【市長】

コンピューター室みたいなね。

【稲垣委員】

そうですね。やっぱりこういうものがすごく身近にあるという状態でやるのがすごく発想のひらめきにもなるのかなと。こういうのはぜひ、やっぱり環境としては用意したいですね。

【市長】

ある種、学校のプールの授業で泳げるようになる人はほとんどいないというのと一緒で、どういう人を育てようとしているのかということでは大事でしょうね。プロが教えてくれるのかな、これも、そういう意味では。そういう設定になってきているんですか。学校の先生が苦手で、僕はもともと、プールとかもまさに先生が泳ぐのが苦手な人が教えてくれたから。結局、スイミングに行っている子が早いですね、そういうのはね。これは外部人材を登用されるんですか。

【指導課長】

今、教育、県のほうがやっているのは、メンターという名前でやっているんですけども、学校の先生方の中から、地域の中心に、中核になってこのプログラミング教育を進める人を養成していくという研修が今年から始まっています。

【市長】

先生ですね、やっぱり。

【指導課長】

そうです。教員です。

【稲垣委員】

相談員。

【教育長】

ほとんど外部の方は入れていないですね、これは。一部、協力していただくこともあるんですけども、まず、ある程度の年配の先生方は非常に苦手なので、これこそ若手の先生たちはわりと得意な分野で、LANを組んだりしてくれることもあるんですね。

【稲垣委員】

そういう方よりも、もっとそういう主体性で、例えば、私のシンガポールの友人がたまたま中学校の子と話す機会があって、今、授業は、出席等もみんな当然のようにスマホでやっているんですね。ゲームとかしないのかと聞いたら、それは人それぞれですよみたいと言われて、ゲームなんて、する子はするけれども。身近にあれば、それがどういう分別というか、私たちは、テレビを見過ぎてどうのって私たちの小さいころはよく怒られましたよね。今はあんまりそういうので怒られることはないと思うんですね、分別がわかるという意味で。身近にこういうのと触れ合うような環境にしておくのはすごく大事なのかなというのは1つありますね。

【教育長】

ツールとして使うということだと思うんです。今の英語をやっていくにしても、こういう器具がある

と非常に、やっぱり全体に広がりやすいということがありますし、それから、理科なんかだと、やっぱり実験主体で、かなり実験をというふうに、そういう方向に向かっているんですけども、例えば、それでも、天体の話をしたり、それから、原子の話なんかをするんだったら、こういうものを使いながら、少し、今のように変えていくとどうなるかとか、そういうところもありますので、だから、かなり使い道はあるんだなとは思っているんですよ。

【市長】

ICT教育とプログラミング教育が一緒なのかというのはちょっと僕はわからない部分があるんですけど、どっちかといったら、プログラミング的思考って、例えば、料理をつくるとかも一緒じゃないんですか。Aという段取りを踏んで、Bという段取りを踏んで、Cという段取りを踏んだらこんな料理ができました。これ、Bがなかったらどういうことになるでしょうみたいなことじゃないですかね。ああ、ここでこしょうを入れておいたらおいしかったのにとか、そういうことですよ、多分。

【教育長】

だから、ICTとプログラミング教育は、全く一緒じゃなくて別物だと思うんですよ。前、フローチャートで云々やっておった部分が、考え方としてはプログラミングの形じゃないかなと思うんです。ただ、そうだけれども、そのときにICTを活用すると広がりますよねということだと思うんですよ。

【市長】

さっきみたいなことがビジュアルでもわかるみたいなことになるということですよ。なるほど。大事だけれど、どういうふうに教えていくかというのは1つ課題はありますよね。

松香委員、お願いします。

【松香委員】

1つはお金の問題。すごくお金がかかりますよね、ものすごくきっちりやろうと思ったら。あとは、教育委員会というのはいつも平等論というのがすごく大事なものであれなんですけど、前、ある公立の中学校で調べ学習というのをやって、各国のことを調べて、35人のクラスで35カ国の違う国のことを調べて発表しましょうみたいなのをやったら、先生が反対されて、コンピューター室があかないからそんなのできないと言ったけど、まあ、とにかくやってみましょうといったら、子どもたちは全然困らなかつたんですね、そういうところに行っているいろいろ調べ、友達の家とかいろいろやって。だから、今の子はすごくアクセスも知っていて、やり方もわかっていて、調べ学習とかは、今、高校だと結構携帯を出してやらせていますよね。中学は難しいのかもしれないですけど、携帯を使って。

この間、ある高校だったら、もう、携帯を出して会話をさせて、それを録音させて、それにお互いに何かやったりとか、オンラインレッスンとかもやらせている高校もあるし、中学でどうするか。携帯は禁止ですか。

【教育長】

ええ、そういうふうになっています。

【松香委員】

携帯禁止。でも、プログラムの前に調べ学習というのでもものすごく、何でも調べられるじゃないですか、今ごろ。それがあって、その後プレゼンとかは、やっぱり、やれと言うと、今の子はどうにか、すごくできますよね、びっくりするぐらい。自分でつくって、パワポぐらいつくって、うちは民間で教師をやっている子は、あるときから、パワポねと一言言ったら、生徒みんなつくってくる、小学生でもつくってこられるので、何ということはないんでしょうね、基本的には。ただ、それをできない家庭もあると、その議論に必ず入りますよね。それをどうするかとなるから、できない家庭は面倒を見るところという考えになると、今の子どもは、稲垣委員も多分そういう年齢の子を持っていると思うんですけど、ものすごくできますよね。パワポなんてほんとうにうまいですよ。一番恐れているのは先生であり、教育委員会でありというのがあって、一般人はすごく進んでいると思います。

【市長】

家で使っていますもんね。

【松香委員】

ええ。そうすると、ないうちはどうするのかという議論になるじゃないですか。そうするとできないとなるじゃないですか。でも、実際には、やらせてみるとどうにかするというのはありますよね。というふうに考えないと、全部ものすごい予算措置が必要なので、全員にやらせるとか。

【市長】

全員に同じものを買って、それを渡してとなると、すごいことになりますよね。

【松香委員】

すごいし、管理できないんですよね、学校では。結局、コンピューターとかを。うちへ持って帰っちゃいけないタブレットをやった学校とかは、みんな失敗していますよね、管理ができないから。

【教育長】

大学なんかは自分で買わせて、それを持ってこさせていますよね。

【市長】

それができないということになる。

【教育長】

できないんですよね。それが難しいと思いますので。

【松香委員】

でも、できるところはそういうふうに踏み出さないと、できる家庭が80%ありますといたら、あと20%を面倒見るとかね。わからないですけど。そういうことは多分議論してはいけないくて、この国では。そこがきついかないと思いますけど。

【市長】

佐賀県で、どこか、タブレットか何か全部導入して、全く動かないタブレットだったというので。

【松香委員】

古くなるし、壊れるし、個人持ちにしないとみんな無責任で、すぐ壊す。

【教育長】

最近、タブレットの世界からノートパソコンの上だけとれるような形になっていますよね。あれが非常に便利だと言われるけれども、ただ、そうするとまたかさんでくるということもありますし。

【松香委員】

学校では管理できないですね。充電とかそんなことがあって、電気がパンクしたとかそんな話は。

【教育長】

中学校で今何台か使っているんですよね。そうすると、もう対応しない部分が多くなっていますので。だから、松香委員ほど、そこまで行けないかもしれませんが、ある程度ご負担いただいたり、自分たちでという部分も活用していく時代かもしれませんね。

【市長】

ありがとうございます。

安藤委員、お願いします。

【安藤委員】

これを見せていただいて、あんなんやったら子どものほうがめっちゃ得意やんと思いました。教えよと言われてもね。あのことが論理的思考にどうつながっていく、いろいろな教科を通じて論理的思考をみたい、何かそのつながりがよくわからなくて、子どもたちは、見よう見まねで、何だかんだと考えていなくて、それこそ、考えるよりも、やってみて感覚で覚えちゃっている。それでどんどん吸収していくという感じだと思いますね。だから、それはそれだしみたい。市長が言われたみたいに、それこそ子どもたちがキャンプに行くときに、自分たちで好きな献立をつくろうと。親子井なら親子井をうちの班ではつくろうと思ったら、何を買ってこないといけない、この子は何をしないといけない、それで、どうやって切って、何を順番に入れるんだということを考えていくことのほうが、よほど論理的思考を磨くことにつながるのと違うかなと思ったりはしています。

今、それはそれで置いておいて、ICT環境ということでは、ほんとうに、16ページと17ページで、ちょっとわからないので教えてほしいんですけど、16ページの右側の色がついているところで、4カ年計画で、えっ、今年までじゃないと思いましたけど、総額6,712億円で以下のようなことができるように構築していくと。地方財政措置が講じられることとされていますとなっているけど、そのお金はどこに行っているのかなというので、17ページにあるようなICT支援員、ぜひ欲しいし、それから、せめて各教室にコンピューター1台、電子黒板1台、実物投影機1台は欲しい。そんなのは全然ないので、実物投影機なんかは学校中で2台ぐらいしかなかったりとか。自分でずっと持ち込んでいて、そんなの一式倉庫から出してきてセッティングしていたら、それだけで1時間終わってしまうので、ああ、映らないのかなんとかと。やっぱり据え置きにしておいて、子どものノートで、何とかちゃんがいいの書いているから、これを見てごらんと、ぱっと映してやると、やっぱり違うんですね、実物を見るということが。そういうことがやれるようにせめてほしいし、右下の校務用コンピューター、教員1人1台というの、1人1台あれば、何か今ちょっとややこしい状態になっているみたいですけど、右側の小さいところを読んでいって、指導案とかそんなのでも別に印刷して配らなくても、メールして、ここがおかしいんじゃないかと思ったら、もらって、紙の無駄も省けるし、時間も減るしみたいなことは思うので、こんなのならいいのになと、次のページにも、地方交付税措置されておりというので、小さい字のところ、総合教育会議において首長と教育委員会が話し合っていくと有効だよということが書いてあるので、えっ、うちはどうなっているのかなと教えてほしいです。

【市長】

有効なというのはね。

【松香委員】

話し合うだけで有効なんですね。

【市長】

でも、少なくとも最低限必要なものはあるよなところでしょうね。まだそれすらできていない状況ですのですね。

【安藤委員】

全然ですね。

【市長】

桑名だけというよりも、日本中、どこに行ってもできていないのかなという感じはありますよね。

【教育長】

かなり裕福なところもありますけれども、ただ、今最初に申し上げたように、これで子どもたちにどんな力をつけるのかというのをはっきりして、最低限何が要するのかということを考えていかないといけないと思うんです。そうすると、今の話じゃないですけども、かなり有効なのは、普通教室に、今あったような電子黒板とまでいかななくてもいいので、大型テレビがあって、実物投影機なんかで接続できるとかというような環境があると、それこそ、今の状態ですと、みんな使っているんで、セッティングするだけで10分ぐらいは必ず要りますからね。だから、常設のような形でそんながあるとすごく有効で、今の状態だったら、子どもたちが多分それを活用して、自分たちの考えをプレゼンしながらつながっていきけるような授業になるのかなと思いますので。だから、各学級に常設というのは、かなり。コンピュータールームとってそこに40台というよりも、そのほうが有効かなとは思いますがね。

【市長】

電子黒板は高いのかな。

【教育長】

大型テレビあたりだったらどうかなと思うんです。大分大量生産になってきましたので。

【安藤委員】

今、テレビは映らないですよ、教室のテレビ。

【教育長】

でも、モニターとして使うわけで。

【松香委員】

ありますか、画像。とにかく映像が映る何か。

【安藤委員】

映像が映る何かはありますが、普通のテレビは、普通の番組は視聴できないんですよ。モニターとして使う。だから、実物投影機の画像は出るけどとかですね。

【市長】

実物投影機はどういうものなんですか。

【教育長】

そのまま映した画面を電子黒板等に像影するので、今お話があったように、この子の計算の仕方をそのままみんなの前に大きく映すことができるので、これに上からのカメラみたいなのがついているような、それはそんなに高くないんですよ。

【市長】

スマホじゃできないんですか。

【教育長】

スマホでもできると思うし、スマホでやったら、ケーブルだけあればできると思うんですけどね。

【市長】

ケーブル要るのかな。わからんけど、Bluetoothで飛ばしたり、すごく簡単にできそうですね。こんな大がかりに言われると、大変だな、できないよ、こんなのと今ちょっと思ったけど。考えれば何か。

【教育長】

だから、かなり工夫をして、安価なやり方もできると思うんですよ。

【市長】

そこへのまだ工夫が、どういう工夫ができるかちょっとわかりませんが。

【教育長】

少し研究させていただいて。それを各学級で使えるような形の環境ができるといいなと思うんですけどね。

【市長】

こういうのをしつつ、論理的思考というか、アプリをつくるとかということなんですかね、プログラミング教育というのは。

【教育長】

いや、そうではないです。

【市長】

プログラマーを育てるとかそういうことじゃないですか。

【教育長】

ではなくて、やっぱり市長さんがおっしゃったような形で、こういう企画とかこんな手心を加えると、結果が違う形で出てきますよと。それが効率的とか、みんなのためになるような形をやっていくというような発想の仕方でも、ICTがないとできないというのでもないと思うんですよ。ただ、そういう考え方をもとにいろんな、繰り返しになるんですけど、広がりを見せるために環境づくりは大事だろうと思うんですけどね。ただ、かなり費用が要りますので、そのあたりの工夫が必要かと思うんですよ。

【市長】

わかりました。

どうやったらみそができるかとかね。このみそがちゃんと、ここは大事だとかね、何かあると思いますけどね。佐藤委員、お願いいたします。

【佐藤委員】

I C Tの環境については、予算等もあるので行けるときに行かれると思うんですけど、先ほど来話が出ていましたプログラミング的思考といいますか、それなんかは、どこまでが教育として携わるかという問題も大きいと思いますけれども、I C T支援員とかプロフェッショナルの方に入っていて、今は先生の後援、ご支援をされるということですが、直接指導されるということもあっていいのかなと思うんですけど、そこでやっぱり教育という枠で、免許があるかどうかとか、いろんな点で多分入り込めない部分ではあると思うんですけど、外部人材が直接指導をするということは、それはいいですか。

【教育長】

いやいや、入り込むことはできませんけど、1人担任が、教員免許を持っている者がおれば、チームティーチングということになりますので、入ってこられるんですけども、その人件費というか、そのほうがやっぱり。

【佐藤委員】

そちらのほうですか。

【教育長】

今のことを少人数指導とか英語関係とかいう形のほうにどっちかというウエイトをかけていますものでというところだと思うんですけどね。

【松香委員】

三重県からもらうとかはできないんですか。何人かいるとかおっしゃいました。

【教育長】

非常勤講師でお願いしているところもあります。それは今の英語の非常勤講師と一緒にですね。

【佐藤委員】

どこまでのことを求めるかによって、教える内容も違うでしょうし、教え方も変わってくるでしょうね。

A Iは、おそらく将来的には人間よりもはるかに上の思考力を持つものになっていくので、どういうふうに指示を出すかというのは、非常にこれが難しくなるところだなと思うんですね。今日も、けさのニュースで、お近くの国で、A Iに問いかけたらとんでもない回答が来たとかありましたからね。意図しないところが進んでいくので、そういった面も非常に注意が必要だなと思います。

【松香委員】

小学校の先生に、申しわけないけど厳しいことを言えば、普通、会社に入っている人はみんな必死で勉強するわけですね。だから、そういう必死さは教員にはあまり感じられないですね。知らなくてもいいわと。英語とコンピューターは、まあいいんじゃない、低学年やればみたいな。済みません。そういう雰囲気はあると思うんですよね。会社に勤めたら、できないとか言えないですね。これ、エクセルでつくっておいてと言われたら、そんなの知りませんと言えないですね。今。じゃ、あなた、やめますかになっちゃうから。

【安藤委員】

すり抜けてやってこれるというまだ環境があるんでしょうけど。ほかにやらないといけないこともたくさんあります。

【松香委員】

そうですね、それはあります、はい。

でも、これから生きていくので、教員も、やっぱり、まだ20代だったり30代だったらそういう世の中を生きていかなきゃいけないので、英語もコンピューターも知っているほうがいいわけですね。

【安藤委員】

若い方たちは大丈夫だと思う。大学でもしてもらっているのでもいいと思うんですけど。

【市長】

少し上の方たちですね。

【安藤委員】

そうですね。私らぐらいになって、途中からそうやって言われると、非常に。

【市長】

じゃ、まさにプログラム教育といえば、松岡委員。

【松岡委員】

それほどでは。野呂先生が「Scratch」をやってもらっておもしろかったです。話がありましたが、プログラムってこんなんやというふうにまず先生方に知ってもらうのと、それから、子どもたちがプログラムってこんな簡単に入れるものなんやと理解してもらうのが第一歩かなと思いますね。

プログラミング的思考というのは、論理的で組み立てられるということと、それから、理系的な創意工夫、こんなふうにすればこういうふうにできるじゃないかと考えさせる、理系的なそういうことができる機会になると思います。

お話が出ていますけど、投資しただけ成果が出てくるものだと思いますけど、これは設備については一部は、一番は外国語教育の設備につながるものかなとちょっと思います。例えば、近くだと岐阜市は、企業の協力を得て、全小中学校にペッパー君が入っていますよね。ロボットです。校長先生と一緒に、朝、玄関のところでおはようございますとやって、そういう環境だったら、自然と、どうしたらこんなふうに見えるんだと思っちゃうから、変わってきます。そういうことになるかなと思います。

ICT関係は、これから産業としてもっと化ける。今、かなり変わってきていますけれども、ビッグデータとかAIとかIoTとか、物同士がインターネットで通信し合う。我々の周りにはみんなマイコンがいっぱい入っているんです。車もそうですし、パソコン関係も、パソコン本体だけじゃなくて、プリンターにもマイコンが入っていますし、炊飯器にも入っております。そういうふうにとどんどん増えていくので、これからさらに化ける産業であるので、そういうふうな人材を育てないといけない。ICT関係の知人、経営している人がいますけれども、とにかく今は人材が足りない。それがもっとこれからも続いていくと思うんですね。

小学校でこういうことを教えると、どうでしょう、1割かそのぐらいは、あつという間に先生を超えて、これを卒業しちゃって、ほかの言語まで学ぼうと。零点何%かは知らないけれども、下手すると自分でコンピューターウイルスをつくるかもしれない。それを避けるような教育も必要ですし、それから、すぐれた能力を発揮する子どもたちを受ける受け皿づくりが必要だと思います。学校の中だとクラブ活動になるかもしれないし、学校の先生だけでは手に負えないようなびかびかした人材も出てくるので、そういう子どもたちは、教育委員会と学校と企業とか高等教育機関が一緒になってそういう受け皿づくりをしないといけないんじゃないか。そういう話を内閣府と文科省に働きかけをしています。コンソーシアムをつくりましょうと。そういうことも桑名市でもできたらなと思っております。

【市長】

確かに、それはあつという間にすごく上達する子がいて、多分、もっといろんなことがしたくなってきて、そのときに、おそらく、さっき学校の平等だみたいな話になると、うちはだめです、魚が動くのしかできませんみたいになると、それはちょっと具合が悪いですね。どんどん伸ばすための受け皿が要ると。なるほど。

【松岡委員】

桑名にある程度そういう仕組みがありますよね。企業でロボット教育をやっているところがありますので、そこへ呼びかけてコンソーシアムをつくるといいかなと思います。

【市長】

確かにそういうのありますね。

【教育長】

そうですね。宇宙産業のあたりのそんなのとつながっていくかもしれない。

【市長】

宇宙もつながるかもしれませんね。それでロケットを飛ばしているわけですからね。なるほど。それはいいですね。その場合は、この地域で、プログラミングの業界に入らないにしても、例えば物づくりのところでそういうプログラミング的思考を使っているような開発をしていくとか、そういう子たちがこの地域で根づいていくみたいなのは大事だと思いますし、もっと言ったら、ここでITを使ってしっかりベンチャーしていってもらいたいな、何かそんなのになっていくと、そういう子たちはあつという間にできちゃいますよね。

【松岡委員】

そういうことを展望に置いてプログラミング教育を捉えるといいかなと思います。

【市長】

先生の感じでは1%ぐらいはいるんですか、そういう子というのは。

【松岡委員】

いいかげんな数字です。

【市長】

それはいいかげんな数字なんですか。でも、確実にいますよね、そういう子も。好きな子はどんどん進んでいくのかな。

【松香委員】

そういうのを使っているところの工場というか、ものすごいプログラムを使っているところを見に行くとか、いいですよ。ああ、こんな世界が来ちゃうのかとか。市役所にペッパー君を買ってくれるのもいいですけども、そういうところありますよね、今。

【市長】

いろいろ、お金のかかる話としては、まあ。プログラミング、大変だなと書いてありますから。

以上で今日の項目3つということで、本日の事項はこれで終了ということになりますが、事務局から連絡事項など何かありますか。

【総務課長】

長時間にわたるご協議ありがとうございました。事務局からは特にございませんが、次回の日程につきましてはまた事前に調整をさせていただきますので、よろしくお願ひしたいと思います。

事務局からは以上でございます。

【市長】

これで本日の事項は全て終わりました。

これもちまして、平成29年度第1回桑名市総合教育会議を終了いたします。今日はどうもありがとうございました。

— 了 —